

## 施設はこわい

特別養護老人ホームではおむつ換えが主な仕事である。一日に四、五回、時間を決めて替えるのが一般的になっている。しかし、それではあんまりだという意見も内部からようやく出始めている。

某県某ホームの若き寮母の任運荘に寄せた便りも、それについての苦悩であった。新任園長がせめて午後十一時と午前二時のおむつ交換増を提案したが、古い寮母たちが次の八つの理由を書き上げて拒否したというのである。

①年よりの言いなりになるのがホームの真の処遇ではない、振り回されている②おしめ替えだけが処遇ではない。他にすることがある③夜中まで替える必要はない④呼び鈴を鳴らさない訓練が大事だ⑤寒くなると夜広げて替えるのはかわいそう⑥寮母が睡眠不足になる、自分の体の方が大切⑦年寄り感覚が鈍くなり、ぬれても感じない⑧そんなに望んでもいないのに再々替えるのはおせっかいだ。

こうした理由づけは施設内部でひそかに言われているのではない。大会でも堂々と

発言し、喝<sup>かつ</sup>さいで迎えられる。まこと、施設は今なお恐ろしい所を深く残しているようだ。おむつ替えを嫌がる定時交換は、理由にもならない理由を数えあげる心の荒廃の中でしか可能ではない。私は思い出す。古い特養ホーム経営者で大分でも講演した田中多聞氏の「おむつの交換回数を自慢する所があるがバカげている」(本紙五十五・九・三)という今もひっかかっている言葉を。

若い彼女は言う。「先輩寮母たちの味気ない仕事ぶり、情けなくなりませす。私は寮母の仕事が大好きです。道は険<sup>げ</sup>しいが、私は進みます」。若さは因習を超えゆく力、挫折を知らぬ世の光である。おむつ替えは一回でも多いがよい。

(一九八二年十一月二十五日)